

## 接触場面に見られる調整行動の分析（プロジェクト B）

木野 緑

### 1. はじめに

接触場面に見られる調整行動の分析をすることによって、参加者が談話を進める上で、どのような調整行動をしているか知ることができる。そこで、より自然な会話モデルを収集し、発話交換がスムーズにできているか、単純調整で十分機能するものかどうか、参加者の役割分担があるのか、参加者の構成の違いやレベル差が影響するのか、などの観点から、2つのケースの談話モデルを分析した。特に、実際使用の場面に近いモデル、つまり3人以上の参加者による談話にしばり、参加者の構成メンバーも異なるものを取り上げ、それらと比較することにフォーカスを当てた。日本語学習者に大学生グループとビジネスパーソンのグループを選び、参加者間および、グループ間のレベル差のある2つのケースの分析を試みた。本稿での分析の結果から、複数のしかもレベル差のある参加者が、接触場面において、さまざまな調整行動を体験する意義と参加者それぞれが学んでいけるストラテジーを探っていきたい。さらに、それが同じ立場、同じ会話上の問題を抱えた日本語学習者のひとつの学習ストラテジーになれば幸いである。

### 2. 調査対象と会話資料

2つのグループの調査対象は次の通りである。

#### グループ

日本語母語話者（日本語教師）ここでは、教師と学習者という関係ではない。

日本語学習者（大学生）香港からの留学生 香港生まれ レベル 中級～中級後半

日本語学習者（大学生）SOAS からの留学生 香港生まれ レベル 初級後半

日本語学習者（大学生）カナダからの留学生 香港生まれ レベル 初級後半

以上4人を順にグループ NS、NNS1、NNS2、NNS3 とする（以下このように記述する）。3人とも女性である。NNS1、NNS2、NNS3 は、寮でも部屋が近く仲がいい。NNS1は、NNS2、NNS3 よりレベルが上で、日本語の授業のみ受けている。かなりレベルの高い文学作品なども課題として取り組んでいる。NNS2とNNS3はクラスが同じで、日本語の授業だけでなく、英語で経済の授業なども受けている。3人は、生まれが香港という共通点がある。

グループ の会話資料は、筆者があるきっかけで3人と知り合い、彼女らと会った時に録音したテープを文字化したものである。（添付資料：録音日 2002年1月）

#### グループ

日本語母語話者（日本語教師）日本語集中プログラムの担当者の一人（筆者）

日本語学習者（証券会社勤務）アメリカ生まれ 数ヶ国語が流暢 レベル 上級  
日本語学習者（証券会社勤務）ブラジル生まれ（日系）ブラジルで弁護士 上級  
日本語学習者（証券会社勤務）香港生まれ アメリカの大学卒業 中級

以上 4 人を順にグループ NS、NNS1、NNS2、NNS 3 とする（以下このように記述する）。3 人のうち、NNS 1 のみ男性でただ一人の既婚者である。3 人とは、彼らが働いている会社の 2 週間の日本語集中プログラムの担当になって知り合った。NNS 1、NNS 2 は、日本語が流暢で特に日系の NNS2 の話し方は日本人と区別ができないくらいである。日本語能力試験 1 級も既に合格し、日本語の外務員試験にも合格。アメリカ生まれの彼も流暢であるが、本人曰く、自己流で学習したこともあって使用語彙に偏りがあるのでは、と心配している。事実、細かい助詞の使い方や使用語彙に偏りが見られる。その中で、一人、日常会話にまだ慣れない NNS 3 が加わっての会話場面である。ここでの資料は、レッスンの後で、レッスンで話題になった問題について引き続き話をした場面を録音し、文字化したものである。（添付資料：録音日 2002 年 4 月）

### 3. 調整行動の分析と考察

上記のような設定で、録音したデータをもとにして談話の中でどのような調整行動が見られたか分析してみる。宮崎（1998）は「これまでの意味交渉の研究では、習得が学習ストラテジーとどのような関係にあるのかが十分に考察されていない」と指摘している。本稿の談話分析をする際、重要な観点として学習ストラテジーの習得を考えながら分析し、考察していきたい。あわせて会話の進行が、調整パターンを類型化することですべて説明できるかどうか考察したい。

#### グループ の会話（資料参照）

録音場所は、早稲田大学内の学生がよく集まるラウンジ。お互いの声もときどき聞き取りにくくなるような状況下ではあったが、それがかえって気楽さをかもしだし、NS（筆者）が日本語教師であることを知っての会話では出てこないようなリラックスモードで行われた。NS もできるだけノーマルスピードで話すよう心がけた。

NNS2 が「日本に来て気がついたこと」とはどういうことか、という質問をした。「夜遅くまで遊んだら電車がない」という NNS 1 の発話から会話が始まった。

例 1

- 7 NNS 1 : タクシーは安いので、タクシーで帰っても・・・。日本はタクシーは  
とても高いので、タクシーで帰る・・・はできない。 （自己マーク・無調整）
- 8 NS : そうね。タクシーでは帰れないね。 （他者マーク・他者調整）
- 9 NNS 1 : はい。帰れません。 （他者マーク・自己調整）

NNS 3 が車の話を持ち出したが、NS は電車にこだわっている。

例 2

- 10 NNS 3 : カナダでは、人々は自分で運転します。  
11 NS : 電車は遅くまでないですか？  
12 NNS 3 : 知らないです。  
13 NS : あまり電車にのりませんか？  
14 NNS 1 : 電車じゃない・・・なくても、バスは 1 日中が・・・1 日中あります。(自己マーク・自己調整)  
15 NS : そうなんだ。カナダも？  
16 NNS 3 : いいえ。  
17 NS : じゃ、これも「気づいたことに」に入れるといいね。

NNS 3 に向けられた質問に対して、NNS 1 は自分でバスの話題を持ち出して代わりに答えている。NNS 3 にバスの話をふっても、車の話題でないため答えていない。ここでの会話で、各国の交通事情、文化背景の違いなどが感じられる。

今回の話題の提供者、NNS 2 が新しいトピックとして、日本に来て初めて体験したことを話し始めた。

例 3

- 18 NNS 2 : たとえば、新宿駅でたくさんスーツを着ている人がいる。いつも・・・。  
19 NNS 3 : 男の人。 (自己マーク・自己調整)  
20 NS : 男の人？ (他者マーク)  
21 NNS 1 : 男の人は、女の人に「テレビにでませんか？」と頼みます。 (自己調整)  
22 NS : ...? ...? (フラッグ)  
23 NNS 3 : どうすれば・・・ (自己マーク・無調整)  
24 NNS 2 : はじめてのとき、わからなかった。 (自己マーク・自己調整)  
25 NNS 3 : 「日本人じゃない」って言っても・・・。 (自己マーク・自己調整)

3 人共通の話題のようだ。NS にその体験をわかってもらうために、3 人が協力して説明している。ここで、目立った調整行動として、仲間の発言を聞いて、自分で気づいたことをマークし、調整行動を行いながら会話を進めている点である。

例 4

- 26 NS : 「今、いそいでいます。」って、さっさと帰ったほうがいいね。  
27 NNS 2 : その人は・・・  
28 NNS 3 : 東口にいます。 (自己マーク・自己調整)  
29 NNS 1 : 南口にも・・・。 (自己マーク・自己調整)

- 30 NNS 2 : いつも、スーツを着ています。 (自己マーク・自己調整)
- 31 NS : 新宿には、スーツを着た、変な男の人がいます。(笑) (他者マーク・他者調整)
- 32 NNS 2 : 渋谷も・ (自己マーク・自己調整)
- 33 NNS 1 : その人、わたしたちが広東語で話しているとき、すぐ逃げます。
- 34 NS : そう・・。
- 35 NNS 1 : それで、広東語で話します。 (自己マーク・自己調整)

例 4 に至って 3 人の協力体制が顕著に現れている。仲間の会話を聞きながら自分の知り得る情報を駆使して会話を組み立てているのが伺える。前のパターンと同じく、仲間の発話に付け加えとして、各自の情報を自己調整しながら進めている。最初、すぐに理解できなかった NS も、次第に事態が理解でき納得していくのである。3 人寄れば何も怖くないという雰囲気であった。リズムができてくると、レベル差はあまり気にならない。こういう状況下でいっしょに会話に参加する行為自体が貴重な体験である。実際の調整行動に関わり体得しながら、意識しないまでも習得できることに意義が認められる。

例 5

- 36 NNS 2 : アルバイトをしたいんですが・・面接は何をしますか。
- 37 NS : あ ~・・。
- 38 NNS 1 : 問題は・・? どの問題を・・・? (自己マーク・自己調整)
- 39 NS : 問題・・? (他者マーク)
- 40 NNS 3 : 答え方。 (自己調整)

引き続き、NNS 2 からの話題提供である。日本での生活にも慣れ、アルバイトをしたいという話題だ。ここでも、NNS 1 から「どんなことを聞かれるか(「問題」という言い方をしている)」、NNS 3 からは「その答え方」についての質問である。発話交換もスムーズに行われている。NNS 3 は一見、おとなしく発言は多くはないが、いつもポイントをついている。

例 6

- 49 NNS 2 : 日本語が話せない人・・はたらく・? はたらけますか? (自己マーク・自己調整)
- 50 NS : 話せるじゃない。 だいじょうぶでしょう。
- 51 NNS 1 : でも・・、規約があったら・・。はやく・・はやく話したら、  
わからない。 (自己マーク・自己調整)

NNS 2 はまだ、不安材料があるらしい。日本語能力も問われるのではないかと、という質問がでた。NNS 2 よりレベルが上の NNS 1 も、自分ではある程度大丈夫とってはいる

が、やはり規約のことや、聞き取りにくい場面のことが心配な様子である。

以上、グループ の 3 人の日本語学習者の調整行動の分析結果を考察しまとめてみる。

1) 日本語学習者 3 人 (NNS 1、NNS 2、NNS 3) の会話の中での役割とそれぞれのストラテジーについて

NNS 1 積極的で、自分でも NNS 2 や NNS 3 よりレベルが上であるという自負がある。まず、会話の口切り役になったり、自分に向けられていない発問にも答えている。もし、他の参加者が自分と同じレベルだったら、こういう行動は見られないかもしれない。

- \* 5 NNS 1 : 夜になるまで遊んだとき、電車がない。
- 14 NNS 1 : 電車じゃない・・・なくても。バスは一日中が・・・
- 21 NNS 1 : 男の人は、女の人に「テレビにでませんか・・・」

NS が考えているのを見て、直ぐに他の情報を考えて述べている。

- \* 38 NNS 1 : 問題は・・・？どの問題を・・・？

この後、筆者が面接官になって、面接の練習をすることになるが、そこでも自分達 3 人が面接のストラテジーをマスターするために、確認する役が自分であるという意識がある。

- \* 64 NNS 1 : どの答えがいい？
- 74 NNS 1 : お金がほしいって、言わないほうがいい？

つまり、談話の中の主導権を握っており、仲間が返答に困ったり、答えが不十分と感じたら、付け加えを行ったり、最後のまとめをすることで今後のアルバイトのストラテジーを自分も確認して、他の 2 人にも確認させている。

NNS 2 今回の話題の提供者としての役割を最後まで果たしている。おとなしいが、会話の成り行きをしっかりと把握しており、現状の問題点を解決して、会話を終わらせたいという気持ちが強い。

- \* 18 NNS 2 : たとえば、新宿駅でたくさんスーツを着ている・・・
- \* 36 NNS 2 : アルバイトをしたいんですが・・・面接は何をしますか。

それと、一見終着かと思える NS の発言が出て、まだすべてを話していないと感じた場合は、会話を打ち切りにしないで、補足の発言をして会話を続けている。

- \* 26 NS : 「今、いそいでいます。」ってさっさと帰ったほうがいいね。
- 27 NNS 2 : その人は・・・
- 31 NS : 新宿には、スーツを着た、変な男の人がいます。(笑)

NNS3 3人の中では、会話力がやや劣るが、自分でしっかりした意見を持っている。意志が強い。彼女はこの会話に加わることにより、どういう学習ストラテジーを身に付けることができたであろうか。最初の話題で、カナダでは電車ではなく、ほとんどの人が車を使って行動している現実がある。それを主張したのにも関わらず、NSに電車について、話題を転換され、それを覆すほど説明する自信もなく、「知らないです」「いいえ」とだけ答えて終わっている。それでも会話が進むにつれて、仲間の発言に付け加えをしながら、タイミングよく調整行動をしながら加わっている。

- \* 19 NNS3 : 男の人
- 23 NNS3 : どうすれば . . .
- 25 NNS3 : 「日本人じゃない」って言っても
- 28 NNS3 : 東口にいます。
- 40 NNS3 : 答え方。
- 77 NNS3 : いろいろな日本人と会えます。日本語使えます。

最後の会話では、前のNNS2の「いろんな日本人にも会えます」という発言を聞いて、すかさず、上記のようにその発言を取り入れ、そのセンテンスを繰り返し、さらに自分の意見を加えて発言するという調整パターンを身に付けている。今回の会話に参加することによって、調整パターンを肌で感じとりながら発言方法のストラテジーを身に付けていることは明らかである。

2) 日本語母語話者と日本語学習者が3人以上(本稿では全部で4人)の場合と2人(たとえば、教師と学習者)の場合の調整行動の違いについて

通常日本語母語話者(教室での)授業では、教師の質問に対して、生徒からいろいろな意見がでて、1対1の質問に対して答える形式ばかりではないが、日本人教師と日本語学習者の教室場面の授業を考えると、教師の質問に学習者が順番に答えていくといった、Q&Aの形式で終わる場合が多い。特に初中級の場合は、討論は難しく、学習している内容をマスターしているにもかかわらず、実際場面では使用できないという現実がある。それは、日本人が話していることばの「意味」がわからないということが原因だけでなく、スピードが速すぎたり、人によって話し方に癖があったり、省略形が使っていたり、予想外のイントネーションがあったりなど、いろいろな原因が考えられるが、問題は、そういう場面での練習がしっかりなされていないことである。慣れない場面で、学習者が実力以上のものを発揮することは望めない。実際場面で問題となるであろういくつかの点は、教室場面でも対応可能だと考えられる。ただ、なかなか実施されていないのが現状である。

今回のように仲間同士の場面に限らず、3人以上の参加者で会話が進行する場面は、自然の会話場面で多く見られる。この場合は、2人の場合と違って、一人のマークに対していろいろな人の調整行動がからんで談話が進行していくのが特徴である。レベル差がある場合は、なおさらである。その意見をフォローする目的で、調整行動が広がりを見せることは間違いない。グループのレベル(初級～中級)で、マルチタイプの談話の調整行動分析の結果を以下のようにまとめてみた。

) 発言に困ったとき、特にとりたてて意見を思いつかないときなど、必ず助けてくれる仲間がいる。目で合図したり、困っている意志表示をしたりする。この場合のストラテジーは、やはり参加者が友達である場合、お互い信頼関係のある場合、あるいは、意図を持って(必要性のある談話のトピック)談話に臨んだ場合に有効である。

) 言いたいことがあるがどう表現していいかわからないとき、途中まででもいいからとにかく自分で発話してみる、というストラテジーを学ぶことができる。つまり、その後は誰かがつないでくれると信じての行為である。(相手が教師だと、最後まで言える自信がない場合、発言のきっかけをつかめないまま黙ってしまう。)

) いつも自分を名指して質問があるわけではないので、気楽である。気楽な気持ちは素直な発話(意見や質問)を引き出すことができる。

) 発話しないときも、仲間の発話を聞いて参考にしたり、その発話に対しての調整行動を再度参考にしながら、談話の進め方、発話の仕方、談話の交替のタイミングなどを学べる。自分でいいと思う方法をピックアップして、身につけるストラテジーを学ぶことができる。NNS3の発話(77)などは好例である。

### 3) 調整行動をしながら、談話に参加する意義について

参加者は意見を出し合い調整行動をしながら協力して会話を進めていくことによって、談話のパターンを習得していく。自分でも意識しないまま、この10～15分の談話の中でも習得していつているのがわかる。NNS3は、談話の前半では、言いたいことがあっても詳しい説明ができないばかりに、「知りません」「いいえ」とだけ答えている。半ばになって、やや話すリズムがでてきている。他の仲間の発言を参考にして、勇気づけられ自分もそういうことなら言える!と。何回か、効果的な発言をしている。後半は、「いろいろな日本人と会えます。日本語、使えます」自信をもって、自分の意見を述べている。わずかの時間であるが、NNS3は談話の進め方のパターンをマスターしたと言える。

このように考えていくと、レベル差のある参加者によるマルチタイプの談話では、特にその中で、談話能力が低いと思われる人が一番有利であると言えるが、反面レベルの上の人にとっても、他の人との会話を聞きながら、自分で会話の流れを調節しながら、ここでの NNS 1 のように、まとめ役をしたりする能力をつけるストラテジーを学べることになる。また、日本語能力のレベルがやや上であるという条件がすべての上で優位だとは言えない。人それぞれ発想は異なっており、いろいろな見方、考え方がるので、それらの意見を参考にすることも大切である。日本語能力だけで、その人を評価できないということは言うまでもないことである。

また、3人いっしょに他のテーマについて談話をすることによって、さらに他のトピックについての関連語彙、文型、それについての意見述べなどの対応が出来ると思われる。その中で自分なりの学習ストラテジーを学んでいくのである。こういう流れを学習者自らが体験していけるような、教材が必要になってくる。さらに、参加者のメンバーを変えたり、日本語母語話者の職種や人数を変えたりしながら、その調整行動パターンの分析をする必要がある。

#### グループ の会話（資料参照）

集録場所は、会社のミーティングルーム（レッスンをおこなっている部屋）。レッスン後、レッスンの中で出てきたトピックについて話がはずんだためテープ録音を試みた。グループ もグループ と同様レベル差のある参加者構成であるが、 と異なる点は、レベルの低い参加者が一人であるという点と、話題があらかじめ相談済みの問題ではないという2点である。つまり、3人で連帯して問題解決にあたるという場面ではないということである。そのことが、どういう影響をもたらしたか、あとで考察してみる。

新聞記事を読んだ後、職種転換の話題になり、NS が、「内閣府が職種転換を促進したいという政策をとっているが、仕事を辞めた後も、同じ業界に戻った人が 64%あった。」という指摘をした。

例 7

- 2 NNS 1 : お医者さんとか、技術を持っている人は転職すると、今まで出た能力が効果がなくなる・・・。  
使えなくなってしまうから・・・。（自己マーク・自己調整）
- 3 NS : じゃ、アナリストはどうですか？ あなたたちみたいな。そういう人はやっぱり・・・
- 4 NNS 1 : 金融・・・（自己マーク・無調整）
- 5 NS : 金融関係にいけますか？（他者マーク・他者調整）
- 6 NNS 1 : はい。職種転換はもったいない。（自己マーク・自己調整）

NS は、自ら発言しそうにない、NNS 3 に意見を求めた。指名されると必ず発言する。大学を卒業して働き始めて 1 年という状況もあり転職という話題にはほど遠い状況である。



例 8

- 7 NS : アイリーンさん、どうですか？  
8 NNS3 : ちょっと、ちがう、他の仕事もしてみたいです。  
9 NS : ああ、そうですか。  
10 NNS2 : ここでも、MA とか投資部門とか・ ・ ・ いろいろあるので・ ・ ・ (自己マーク・自己調整)  
11 NS : 同じ会社でも、違う仕事はできますね。 (他者マーク・他者調整)

NNS1 と NNS2 は他の業種でも仕事の経験があるので、常にそういうことに関心を持っている。「ちがう仕事もしてみたい」という NNS3 の発言に対して、NNS2 は即座に同じ会社においても、部門が変われば違う仕事もできるという意味の発話をしている。この発言からもわかるように、発話内容は発話者の社会的地位や文化的背景、経験などに大きく関わっていると言える。

「定昇を廃止して、より実力主義という記事についてどう思うか」という NS の質問に対して、NNS2 はすぐに賛成を表明。しかし、その後問題点を付け加える。

例 9

- 16 NNS2 : 部下に年下の人がいると・ ・ ・ (自己マーク・無調整)  
17 NNS1 : それはそうかもしれないけど・ ・ ・ (自己マーク・無調整)  
18 NNS2 : つらいよね。 (自己マーク・自己調整)  
19 NNS1 : つらいかもしれないけど、そうしないと景気が回復できないと思う。  
(自己マーク・自己調整)

最後まで言い切っていない。NNS1 は NNS2 の気持ちがすぐにわかったらしく、それに対する意見述べをしている。その後、NNS2 は前に述べたの自分の意見の続きを言って、意見をまとめている。NNS1 も同様である。ここで、NNS3 は全然話に入れなかったようだ。この後、さらに「管理職の問題」「ワークシェアリングの問題点」などに話が及んでいった。NNS3 は 1 回発言したが、それのみであった。NNS1、NNS2 とともに、しっかりした人生感とそれを表現する日本語能力を持っていることが幸いして、会話は時間がゆるせばいくらかでも続いていくと思われた。

グループ の調整行動に見られた分析結果の考察を試みる。

- 1) グループ との相違点 (参加者構成、参加者の職種、全体のレベル、談話のトピック、談話のタイプ) がもたらした影響について
  - ) 参加者構成がもたらした影響について
- レベルが低い NNS3 が 1 人だったため、会話の主導権を握る人が 2 人になった。その

ため、NNS3 は決して意見がないわけではなかったが、そのリズムに入っていけなかった。レッスン中は、各自プレゼンテーションをするという作業があったり、NNS3 の得意分野である、ビジネス文書作成というタスクも入ったりするので、平等に参加することは出来るが、レッスンを離れて自由な意見述べになると、途端に出番がなくなる。同じレベルの人がもう一人いれば、お互いにあいづちを打ったり、助け合ったり、同じスピードでの会話が楽しめたのではないが。

) 参加者のレベルおよび職種（社会的位置）が調整行動に及ぼす影響について

グループ の参加者のレベルが高かったことも影響したと思われる。また、参加者の性格、あるいは学生とは違い競争の激しい職種で働いている状況も影響している。現在働きながら、次の仕事先の面接をこなしている人は多いということであった。それぞれ自分の確固たる意見を持っており、相手の意見を聞く余裕はあるが、それを取り入れようとする態度があまり見うけられなかった。

) トピックの内容が調整行動に及ぼす影響について

あらかじめ相談できる内容ではなかったこと、同じストラテジーを持って臨んだ場面ではなかったことなどが調整行動に影響したと考えられる。また、その人の経験が大きく発話に反映するようなトピックに関しては、平等に発話を求めるのではなく、お互いに質問する形式をとるなどの工夫が必要である。

) 談話のタイプが調整行動に及ぼす影響について

あらかじめ意図するものがある談話のタイプと、その場面で突発的に発話を求められるタイプの談話では、そこで見られる調整行動も違ってくる。特にレベル差がある参加者構成の場合は、同じ次元で発話を求めるのは、やや無理がある。その場でペア（レベルの高い学習者と低い学習者の）を作らせ、意見をまとめて発表する形式が効果的であると思われる。その際、コンプリートビギナーと中級の学習者のペアはやはりレベル差があり過ぎて困難であるということはいうまでもない。

2) グループ との共通点について（調整行動のパターンから）

グループ の調整行動と同じパターンが見られた。それは、会話の前半～半ばまでは単純・複合などの調整行動が見られ、お互いに意見を補い合いながら進めていたが、後半になると、リズムが出てきて、ほとんど調整行動が見られないままスムーズに会話が進行していった。つまり、談話の進行につれて、参加者の発話パターンはよりスムーズになっている。ほんの 15～20 分くらいの会話であったが、自然に会話が進行していく中で、参加者は次第にそのパターンを習得していつているのがわかる。

#### 4. おわりに

接触場面で見られる調整行動の分析をしながら考察していったが、本稿での談話分析はごく一部のものであり、すべてに当てはまるかどうかはさらに多くのケースを分析してみないと明らかではない。しかし、はっきり言えることは、自然な会話は質問に対して答えを述べて、次の問題に進むといった単調なものでは決してなく、質問の答えがわからず、聞き返しても、それも失敗に終わるということもある。助けが入って救われ、その結果、お互いの知りたい情報が明らかになったりもする。そういう過程があってはじめて目標を達成していける。つまり、参加者全員で協力して調整行動を続けながら、談話を継続していくという事実が明らかになったと思われる。

意味による調整ばかりでなく、話すスピード、イントネーションなどに加えて、参加者の人間関係によるところも多い。あるいは社会文化要因（職種、年齢、経験の差、育った文化背景など）も大きく影響していると考えられる。本稿の2つの資料がそれを物語っている。本稿では参加者の構成として、日本語母語話者が1人の場合を分析したが、今後は、日本語母語話者が複数の場合、あるいは日本語学習者のみの場合、さらには談話のタイプとして、目標あるいは意図するものを持って臨んだ場面とそうでない場面の比較をするなど、さまざまなケースの実証研究が必要であると思われる。

毎日が忙しく、集中して日本語を勉強する時間が持てない学習者からの要望をしばしば耳にする。「一人でも、勉強できるテキストを作ってほしい」というものである。自学自習できる教材とは、どんな教材であろうか。相手がいて、コミュニケーションをしながらの学習が実際場面のインターアクションに役立つことは周知のことではあるが、現実には様々な問題があるということである。教室場面で学習することすら難しいとなれば、いろんなバージョンを含んだ、登場人物も2人ではなく、3人あるいは4人の場面を作りださなければならない。3人いれば、3様の考え方がある。国が違えば、さらに文化やものの考え方も違って来るからである。しかも、その内容が実際場面でも起こりうるリアルなものでなければ学習する意味がない。作られた会話ではなく、その場に居合わせたと思われる談話パターンの提供が必要になってくる。

その中の人物が、ある時は相手のことばを聞き取れなかったり、敬語の使い方を間違えたり、それを友人からアドバイスされたり、いい表現が思いつかず困っている人物にアイデアを提供する人物がいたりするような構成が必要である。そんな教材作成のためにも、さらなる実際場面での調整行動の分析が必要である。「一人でも、勉強できるテキストを作ってほしい」と願っている学習者がいるという現実を避けては通れない。それは、既に学習ストラテジーを自分で体得している者からの更なる飛躍へのメッセージとも受け取れる。現存の教材に満足していないという事実である。枠からはみ出さない、決まりきった会話パターンだけの教材は必要ないのかもしれない。

参考文献

- 宮崎里司 2002 「第二言語習得研究における意味交渉の課題」、『早稲田大学日本語教育研究』、創刊号、71-89 頁
- 宮崎里司 2000 「コミュニケーション調整と調整マーカ―：聞き返しの観点から」、『第二言語としての日本語の習得研究』、3号、57-93 頁、第二言語習得研究会
- 宮崎里司 1998 「第二言語習得理論における調整、意味交渉及びインプット」、『早稲田大学日本語教育センター紀要創設十周年記念号』177-190 頁、早稲田大学日本語研究教育センター
- 宮崎里司 1990 「接触場面における仲介訂正ネットワーク」、『日本語教育』、71 号、171-181 頁